

第13回 松山大学図書館書評賞



Contents

● 第13回松山大学図書館書評賞

表彰式	P2
審査委員による全体講評	P3
作品紹介・講評	
優秀賞	P4
佳作	P5~7
第14回書評賞応募要項	P8

「第13回松山大学図書館書評賞」表彰式

2013年12月17日表彰式が行われました。今回は、応募総数12編の中から厳正な審査のもと、4名の受賞者を決定しました。受賞者、受賞作品は以下のとおりです。

最優秀書評賞

該当者なし

優秀書評賞（1名）

森田 留衣（法学部法学科4年）

『内定を決めたひと言』 常見陽平著、中経出版

佳作（3名）

高崎 遼太（経済学部経済学科4年）

『TPP黒い条約』 中野剛志編、集英社

安倍 由里子（人文学部社会学科2年）

『ハマータウンの野郎ども』 ポール・ウィリス著、熊沢誠・山田潤訳、筑摩書房

額田 麻歩（薬学部医療薬学科3年）

『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』 若泉敬著、文芸春秋

表彰式の様子



第13回松山大学図書館書評賞 審査委員による全体講評

審査委員長 法学部教授 銭 偉栄



例年に比して今回の応募件数が少なく、しかも読書感想文のたぐいのものが多かったという印象を受けた。もっとも、審査の対象となる数少ない書評の中には、審査委員のメンバーの目を引く書評があった。また、応募者が書評の対象として選んだ本は、政治・外交や教育など幅広い分野にわたっている。さらに、それには、いわゆるハウツー本だけでなく、専門書も含まれている。以上のことから、少なくとも世の中の動きに対する応募者たちの関心の広さが分かり、審査委員会のメンバーの一人として、私もほっと安堵の胸をなでおろした。

若者の「読書離れ」「活字離れ」が指摘されて久しい。インターネットおよびパソコン・携帯端末の普及に伴い、書籍・雑誌・新聞などといった紙媒体を読む時間数が減少しつつあるという意味においては、この指摘は正しいといえよう。読書の目的はさまざまあるが、情報を取得するのもその1つである。社会生活を営む上で最低限必要とされる情報は、インターネットを通してでも簡単に入手することができ、かつ、それで足りる。インターネット白書2012によれば、情報取得量にしても1日当たりの利用時間の長さにしても、インターネットが雑誌や新聞等紙媒体を圧倒している。したがって、情報を取得するという目的論からみれば、「読書離れ」というのは、単に情報取得のための主たる手段が紙媒体から電子媒体へ移行しつつある、または移行したことを意味するものに過ぎない。このこと自体は、情報掲載媒体の多様化によってもたらされた必然の結果であり、また若者に限ったことではないから、とくに憂慮すべきことではないと思われる。

とはいえ、若者の「読書離れ」は無視できない。なぜなら、情報取得が読書の唯一の目的ではないからである。インターネットの普及で情報氾濫の時代を迎えている今日では、氾濫した情報に流されず、さまざまな情報の裏に隠されている真実を見つけるためにも、それらを取捨選別する能力が情報の受け手に求められる。そうした能力を培うには、やはり日頃から一冊の本を精読してその内容を正確に把握した上、その本に対して自分なりの評価を加えるという訓練を受けるほかはない。書籍と同等の長文を読むには適さないと言われている電子媒体には、このことを期待することはできない。書評賞の意義はまさにここにある、と私は信じている。

今回審査委員のメンバーの3人が慎重な審議を重ねた結果、残念ながら最優秀賞に該当するものは「ない」という結論に達した。今後は、いかにして書評の書き方教室により多くの学生を参加させて、読書感想文と書評との違いや書評の書き方を身につけさせることができるかが、書評賞を存続させるための重要な課題の1つであるといえよう。

第13回松山大学図書館書評賞 受賞者および受賞作品

優秀書評賞

森田 留衣

(法学部法学科4年)

『内定を決めたひと言』

〔請求記号：377.9/Ts〕

著 者：常見陽平

出版社：中経出版

出版年：2009

内定。この一言をもらいたいがために若者たちは就活をする。しかし、内定という言葉は簡単にはもらえない。もちろん、就職活動においてこれを言えば内定がもらえるという魔法の言葉も存在しない。

そこで、注目してもらいたいのが本書のタイトルである。「内定を決めたひと言」と聞くと、面接で使えるインパクトのある言葉があるのかと思われる方もいるだろう。だが、そんなに世の中甘くはない。残念ながら、そんな魔法のよ



うな言葉はない。だからこそ、就活生は何度も会社の選考に落ちては悩み、迷っては再び新たな履歴書に文字を刻んでいくのである。就活には答えがないのが現実。内定をもらった先が自分に合うのか、いつになったら内定がもらえるのか誰にも分らない。社会に出ていく不安と期待、周りが決まっていって焦りと悲しみ様々な感情が渦巻いていく。そんな時にこそ、本書を読んでもらいたい。

本書では、著者が集めた学生が就活中に会った言葉や社会人から就活生に向けてのメッセージが集められている。就活に疲れた学生に励みになる言葉もあれば、社会人の考えさせられる一言など生きた言葉が詰まっている。就活が始まると様々な人で出会う。そこでたくさんの言葉をもらおうだろう。たとえば、母親、友人、OB訪問先の先輩、人事採用担当者、就活コンサルタントの方など出会った数だけ物語がある。それぞれに、どこか忘れがたい言葉があるはずだ。一言がきっかけとなり、あなたに次への一步を踏み出す勇気を与えてくれる。

世の中には、就活関連の本がたくさんでいる。面接対策や筆記対策、ある時は成功した人の実例などそのどれもが誰にでも通用する内容の本である。しかし、本書は他の就活本とは違う。数多くある就活マニュアル本と大きく異なるのは、学生が社会にでる一步の後押しの本ということだ。正直、他の人の成功例を読んでも深い関心はない。面接対策も、基本入退室のマナーであり、他には今までの質問とそれに対する回答がほとんど。おまけに、実際に就活をしていて本と同じことを聞かれるかは運次第といったところ。筆記対策も同様に、本と似た問題はであるが就活の最終試験はほとんどが面接だ。序盤は活躍しても、後半は役に立たないといっている。何度も落ちることを繰り返す就活だからこそ、本当に学生がほしいのは後ろ押してくれる一言なのだ。社会へ出るために、学生は就活で初めてのことを多く経験する。それは、大きな成長にも繋がるが時には疲れてしまう。就活に悩んだとき、疲れたときはぜひこの本書を読んでもらいたい。この本に、内定への「答え」は載っていないが、あなたをもう一度前に進ませてくれる言葉がある。「答え」ばかりを追いかけて、たまには次に動くためのヒントを探してみてもどうだろうか。

講評

審査委員代表 法学部教授 錢 偉栄

本書評が優秀賞に選ばれた理由として、とりあえず次の3点を挙げるができる。1つ目は文章が読みやすいことである。読みやすさは書き手に求められる文章の基本である。評者はそのことを心得ている。2つ目は、書評の対象となる本の内容を紹介した上、その本に対する評者の評価を書くという、書評としての体裁を一応整えていることである。3つ目は就職活動進行中あるいは就職活動経験済みの4年生ならではの視点からの本に対する評価が印象的だったことである。この点こそが、本書評に対する評価を決定づけたものといえる。

「内定を決めたひと言」。就活生が面接で「これ」さえ言えば、面接担当者の心が打たれて内定を決めてもらえる、そのような魔法の言葉が本当にあるのか。この本のタイトルを見た人は誰もがそう思うであろう。しかし、評者は書評の冒頭で、きっぱりとそれを否定した。それでは、「内定を決めたひと言」とはいったいどういう意味だ。その本を一度手に取って読んでみよう。評者はこうして読み手の気持ちを本の内容に向かわせる。これが本書評の醍醐味ではないだろうか。

評者が大学4年生であることを考えると、無理難題かも知れないが、評者の将来を期待するという意味を含めて、あえて本書評に対して次の問題点を指摘しておきたい。すなわち、就活生を取り囲む者たちにとってこの本がどのような価値を持っているか、という視点からの評価もほしかった。この本にまとめられている「言葉」は就活生に向けられたメッセージであることは間違いない。本の著者もまたそのような意図のもとでそれらをまとめたのかも知れない。しかし、私には、同時に就活生を取り囲む者たちに向けて発せられたメッセージでもあると読める。内定をもらうために就活生が悪戦苦闘しているときや心身ともに疲れたときに、その周りの者たちが一体どのような言葉をかければ就活生を元気づけることができるかを考えさせてくれる一冊でもあるからだ。

今後、文庫本や新書、さらには専門書などを対象に選り本格的な書評を書いてみることを評者に期待したい。

佳作

高崎 遼太

(経済学部経済学科4年)

『TPP黒い条約』

〔請求記号：081/S25/695〕

著 者：中野剛志編

出版社：集英社

出版年：2013

「TPP って関税がどうかこうとか……」。

これを耳にした時、少し落胆した。彼らもTPPについて言葉だけを知っていて、大事な中身はマスメディアの情報と何ら変わらないからだ。マスメディアについて悪いことを言うつもりはない。良し悪しは別として、私たちはその情報を基にして考えている部分が多いからだ。しかし、あえて苦言を呈するならば、



提供する情報の公平性という部分を意識して報道するべきではないのか。

例えば先ほどのTPPに関してもそうである。出会ってきた多くの方が、TPPの話となると、異口同音に関税、自由貿易、農業と言う。本来ならば、他にもっと重要な問題が潜んでいるのにも拘わらずその話になるからだ。

こうした観点からすれば、マスメディアというものは私たちに絶大な影響を及ぼしているのだということが分かる。それゆえに、国民の多くが、本来中身を知ると大問題になりそうなTPPの事項について認知していないのは、当然として疑問視されるべきであろう。

本著は7章構成となっており、当然ながらTPPの持つ危険性を論じた内容となっているが、上述の様なメディアの在り方についても絶妙に、しかし存在感を消してそれを問題提起している点では素晴らしい。また、本著において、これが影であるとするならば、光であるTPPには、マスメディアがほとんど報じない問題点が指摘されるに違いない。

問題点は幾つか論じられているが、分量の都合で、恐縮ながら一つだけを皆さんに紹介する。本著第3章で論じられているISD条項というものだ。

ISD条項とは、端的に言えば企業が国家より上の位になることである。これは外国の企業が進出国で法律や行政上の問題で損害を被った場合、即座に国家を訴えることができるというものだ。これを食の安全保障に則して考えるならば、食品の添加物の規制や残留農薬の規制なども提訴の対象と成り得てしまうのだ。もし、こうしたことで日本の食の安全保障が揺らぐ可能性が生じるのなら、私たちは本当にTPP加盟が是なのかを再考しなければならないはずだ。さらに、これは法律分野であるが、他に医療、金融といった幾多の分野が俎上にあるのだ。まさに根の深い黒い条約と呼ばれる所以であろう。

無為自然ではなく、この問題点を皆が共有できていれば、TPP賛成に対する方向性にも変化があったかもしれない。そう考えると、本著は私たちにTPPの危険性を喚起するだけでなく、問題を全員で共有することが、危機管理に繋がってくると訴えかけたかったのではないか。その意味での冒頭の落胆もある。

終わりに、本著はTPP反対派で一躍有名となった評論家の中野剛志氏はじめ、弁護士、ジャーナリスト、大学教授といった様々な分野で奮闘されている人たちの論考が収録されている。そのため一冊読了すればTPPの本質が掴めるようになっている。また、TPPは示唆にも富んでいる。理解すれば知識が体系化される。その意義も含め本著の効用は高いと言えるだろう。

講評

審査委員代表 経営学部准教授 柴田 好則

本の内容と特徴が適切に紹介されている書評となっている。とくにこの本で論じられているTPPの問題が、巷にあふれるTPP論とどのように違い、どのような意義があるのかという視点から批評が行われているところが優れている。

ただ難を言えば、日本語表現が多少粗いところや的確ではない部分があり、それが惜しまれる。たとえば「俎上にある」という表現があるが、正確には「俎上に載せる」と記述の方が望ましい。また「則して」が「例にして」という意味で使われているが、前者は特定の基準に従うという意味なので正確ではない。これらの点を意識して改善すれば、さらに優れた書評となっていたであろう。

佳作

安倍 由里子

(人文学部社会学科2年)

『ハマータウンの野郎ども』

〔請求記号：367.6/W 61/1〕

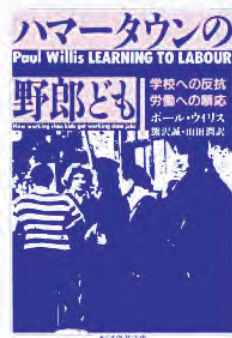
著 者：ポール・ウィリス著
熊沢誠・山田潤訳

出版社：筑摩書房

出版年：1996

人は自分の階級に応じた職を選び取っていく傾向にある。決して他人に強要されるまでもなく、いわば自発的に。その職が例え、報酬や社会評価が低く、内実において無意味さを増していたとしても。

こうした社会機構の一端に疑問を呈すことから、この本は始まる。舞台はイギリス。著



者は、自らたてた問題提起に対する仮説を以下に求める。つまり、報酬や社会評価が低いとされている、手の労働を選び取る判断が行われるのは、労働階級の生徒たちが形成する反学校の文化においてである、と。そこで、反学校的な態度を示し続け、学校卒業後には就職へ赴くことが予想される男子生徒＝野郎どもに焦点を当てて調査が進められることになる。野郎どもが学校卒業後に行き着く先は、おそらく世間でいう、階級社会の下半分に位置づけられている職だ。著者は、野郎どもを中心に、学校に従順な生徒＝耳穴っ子たちと比較しながら分析を進めていく。調査に当たって、著者は実際に調査対象の者のメンバーの一員となって調査する、いわゆる参与観察法という形態をとっている。参与観察法だからこそ聞くことができる、野郎どもの本音。そこから明らかになる、野郎どもの反学校文化の諸相。そして徐々に紐解かれる、問題提起としてとりあげられた社会機構の一端。参与観察法であるからこそ、聞き出せたであろう、生々しい野郎どもの本音を辿るにつれ、私自身、今まで持ち続けていた常識が覆された気がした。また、著者の犀利な洞察力からは、調査者はこういった姿勢で調査に取り組むべきか、といったことを教えられた気がした。尚、著書は、最初に呈した問題提起以外にも、副次的な課題として労働階級の文化が持つ重要な特性を検証しようと試みている。

社会という枠組みから、労働と教育という卑近なテーマを取り出して研究を進めた一冊。問題提起や副次的な課題以外にも、この本が問いかける課題は数多くある。それだけに、この本を読むことで、イギリスの社会機構に対して一石を投じることができるようになるのみならず、日本の社会を俯瞰して見るができるようになるはずだ。この本のページをめくる先に、新たな世界が広がっている。

講評

審査委員代表 経営学部准教授 柴田 好則

本書評の受賞理由は、高度な内容の本書を評者なりに理解し、評者の言葉でそれを紹介することに成功している点である。本書は優れて学術的な内容である。そのような本に挑戦し、そのエッセンスを読み解こうとする評者の意欲が好印象であった。また、「階級社会」「参与観察」などのやや難解な用語も正確に理解しており、評者が本書の内容を字面ではなく深く読み取っていることがわかる。

ただし本書評は、本に対する評価が不十分であった。書評とは書物に対する評価である。したがって、本書評は本の紹介としてはとても優れているが、批評の面で十分であるとはいえない。この点を改善すれば、さらに優れた書評となったことだろう。

佳作

額田 麻歩

(薬学部医療薬学科3年)

『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』

(請求記号：319.1053/W33/1)

著 者：若泉敬

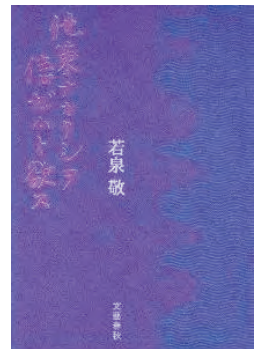
出版社：文芸春秋

出版年：1994

あなたは沖縄に米軍の核兵器が配備されていたのを知っているだろうか。

平和を脅かす核兵器は沖縄返還協定を前に撤去された。しかし、まだ、人々が不安で夜もおちおち眠れなくなるような恐るべき真相が身を潜めていた。有事の際には沖縄に核兵器を再度持ち込むという密約が米国と交わされていたのである。

日本に核兵器を持ち込むなんて嘘だろう、



非核三原則があるじゃないかと思った人もいるだろう。

ところが、これを聞くとそんな呑気なことを言うてはいられない。なぜなら、その密約を交わしたのは、非核三原則を提示したことでノーベル平和賞を受賞した佐藤栄作総理自身だったのである。

本書は、沖縄返還に命を捧げた密使若泉敬が自らの責任を公の場で公表するとともに罪の意識を確認するために書き残した告白本であり、日本の理念を問う一冊だ。

著者若泉敬は東京大学法学部を卒業後、米国ジョンス・ホプキンス大学高等国際問題研究所に留学、防衛庁を辞して私立大学に籍を置き国際政治学者として活躍をしていた。その頃、沖縄返還問題で窮していた日本政府は米国とコネクションのある若泉氏に密命を託し極秘交渉を進めさせたのであろう。

「核抜き本土並みの返還を！」という著者の切なる願いは、当時、ベトナム戦争の只中だった米国に受け入れられる筈もなく、密約は苦渋の選択だった事が行間から読み取る事が出来る。事細かに添えられた注釈、淡々と語られる真実。頁を捲る度、「志はあるのか」と問われているようで思わず背筋を正した。

「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」

ふと、寺山修司の短歌が脳裏を過った。

もし、著者が密命を帯びることがなかったら、この様に重い十字架を背負う事はなかっただろうに……。輝かしい未来を捨て郷里に門を閉ざしてなお、沖縄の痛みから決して目を背けることなく、日本の未来を憂慮して本書を書き上げ英訳版の契約を交わした後に自死した著者。

本書の表題は陸奥宗光の著書「蹇々録」の言葉から、新装版の解説は本校の開学記念講演会にも来校された手嶋龍一氏。

私が本書を手にしたのは、手嶋氏の著書「葡萄酒か、さもなくば銃弾を」の中のエピローグ月下美人若泉敬が心に残ったのがきっかけである。

手嶋氏は解説で「二十一世紀の日米同盟を担う若い世代は、本書から安全保障が直面しなければならない本質を掴み取って欲しい」と述べている。

私の故郷高知の空にもオスプレイが飛来する昨今、本書を暗い歴史の闇の中に埋もれさせてはならない。愚者の楽園の中のひとりにならない為に精読したい本である。

講評

審査委員代表 薬学部教授 河瀬 雅美

沖縄返還交渉の成立のため佐藤栄作総理の密使として交渉にあたった著者のドキュメント作品の書評である。著者の若泉敬は、「NHKスペシャル 密使 若泉敬 沖縄返還の代償」(2010年6月19日放送)や「総理の密使～核密約42年目の真実～」(TBSテレビ、2011年2月21日放送)などで取り上げられた人物であり、若泉に関する研究・評伝も数冊出版されている。

さて、この書評の優れている点は、何ととっても文章が上手いことにある。すらすらと読むことができる。寺山修司の短歌を入れるなど額田さんの文章力の高さを示している。そして、額田さん本人の思い入れとか、個性というものも十分感じさせる作品である。惜しまれるのは、後半で手嶋氏の解説文を入れたことであろう。額田さんの思いを全面展開する書評で良かった。どろどろした交渉の裏で「密約」を結んで交渉を成立させたドキュメント作品を、さらりと書ききった文脈が評価されて、佳作に選ばれた。

注) 受賞者の学年は受賞時のものです。

書評賞各作品への講評および過去作品は、松山大学図書館ホームページに掲載しています。

(<http://www.matsuyama-u.ac.jp/lib/syohyo/syohyo01.htm>)

第14回松山大学図書館書評賞応募要項

1 応募資格

本学学生（松山大学 及び 松山短期大学学生）、ただし大学院生は除く。

2 書評対象図書

松山大学図書館所蔵の図書であること。

3 応募要領

- ・図書1冊につき800字以上1,200字以内とする。
- ・原則として、ワープロ原稿に限る。マイクロソフト社のWordを使用すること。
- ・応募件数は、2篇以上も可（但し受賞は一人1篇とする）。
- ・応募作品は未発表のものに限る。
- ・応募後の書評の使用権は、松山大学に帰属する。

4 応募期間・提出先

2014年8月21日（木）～2014年9月30日（火）午後5時（時間厳守）

5 応募方法

学内ポータル図書館及び図書館ホームページの「書評賞応募用紙」（所定の様式）（Word）を使用し、E-mailに添付し送付する。

- (1) メール の 件名 に「書評賞応募 学籍番号 氏名」を記入する。
- (2) 宛先：mu-libs@matsuyama-u.jp

6 表彰

最優秀書評賞 1篇 表彰状及び副賞（図書カード2万円）
優秀書評賞 2篇 表彰状及び副賞（図書カード1万円）
佳作 5篇 表彰状及び副賞（図書カード5千円）

7 入選発表

2014年12月1日（月）午前10時
図書館内、図書館ホームページ及び学内ポータル掲示板にて発表する。

8 書評について

読書感想文ではなく、書評＝「書物の内容を批評・紹介すること」であること。

9 公開

「図書館ホームページ」及び「松山大学図書館報」に入選作品と講評を掲載する。

編集後記

図書館のシステムがリニューアルされた。前回は2004年に変更になったとのことで、およそ10年間お世話になったことになる。

今回の図書館報は、書評賞をメインテーマにしているが、残念ながら12編と過去最低の応募者数であった。ちなみに10年前の2004年度は102編と過去最高である。

図書館員の周知不足、若い世代の読書離れ、いろいろ原因は考えられるが、この書評賞に関しても、なにかしらリニューアルが必要な時期になっているのかもしれない。

松山大学図書館報 No.53 2014年4月1日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL (089) 925-7111 (代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail:mu-libs@matsuyama-u.jp